キラめくこの人に聞きました。 第14回

「誰でもどこからでもやり直せます」ドヤ街に命の火を灯す『きぼうのいえ』

取材・文　米山義男（フリーライター）

情熱と信念で「きぼうのいえ」を実現した山本雅基さん

山本雅基さん(42)はこの3月、その名も「東京のドヤ街山谷でホスピス始めました。『きぼうのいえ』の無謀な試み」（実業之日本社）という本を上梓しました。「子どもの頃から、困っている人や恵まれない人を助けたいと考えてきた」という山本さんはクリスチャンですが、「山谷のホスピス」は単にヒューマニズムという情熱だけでなく、社会福祉などの行政サービスを柔軟かつ逞しく活用する才知もあってこそ実現しました。そこからは、通常の施設ホスピス（病院の緩和ケア病棟）とは違う新しい可能性も見えてきます。

「山谷」という地名は、実は地図にはありません。40年も前の町名変更で、東京都台東区清川や日本堤、荒川区南千住などに変わったからですが、日雇い労働者が暮らすドヤ（簡易旅館）が軒を並べる一角は今でも昔の呼び名で呼ばれています。

「でも、若い人は山谷を『ヤマタニ』と読んだりしますからね。この街もずいぶん変わってきています」

身長180センチはある偉丈夫の山本さんは、人なつこい笑いを浮かべます。

高度経済成長の頃、山谷には2万人を超える日雇い労働者がいたといわれます。しかし、バブル崩壊後の不景気でその人数は減り、簡易旅館のなかには外国人旅行者向けの格安ホテルへ変わるところも増えています。

それでも、山谷にはドヤ住まいの日雇い労働者、また公園や隅田川の川岸などに青いビニールテントを張る路上生活者（ホームレス）は約5500人いるといわれます。彼らの多くは男性ですが、ここでも高齢化が進んでいて、平均年齢は65歳を超えるといいます。人通りが疎らな道端で昼間から酔いつぶれている人、サイコロ賭博のチンチロリンに興じる人たちにも老いが目立ちます。

「高齢化で、病気の人も増えています。彼らは家族と縁を絶ち、身寄りもない境涯ですから、倒れたらいったい誰が面倒をみるのか。それが『山谷のホスピス』を始めたきっかけです」

山谷のど真ん中といえる場所に「きぼうのいえ」ができたのは、2002年10月。鉄筋4階建て、ベージュのレンガ貼りの外観は瀟洒で、山谷の灰色の街並とは全く雰囲気が違います。

部屋は21室あり、独り暮らしに慣れた入居者のために全室個室。広さは4.7畳で、ベッド、冷蔵庫、ビデオ付きテレビ、エアコンが備わり、ちょっとしたビジネスホテル並みです。また、すぐ隣には11室の民間アパートを丸ごと借り上げた姉妹施設「なかよしハウス」もあり、外装はやはりベージュのレンガ貼りに補修されています。

二つの施設を管理するのは「山谷・すみだリバーサイド機構」というNPOで、山本さんはたった一人で事業を始め、今はこの理事長であり、かつ二つの施設の施設長です。

驚くのはこの立ち上げには大変な費用がかかっていることで、土地取得、建築・設備などに要したのは、しめて1億8000万円。そのうちキリスト教会などから6000万円の寄付を受けましたが、残る1億2000万円は銀行からの借金です。

「その頃のぼくは貯金がほぼゼロで、自己資金として当てにできるのは、結婚したばかりの妻（美恵さん・46）の虎の子の銀行預金約1000万円だけでした」

そう聞くと、何だか怪しい話のようにも思えますが、これだけの金額の寄付を集め、高額な銀行融資まで取りつけた情熱と才覚には感心させられます。

関係性を重視する「きぼうのいえ」スタッフと入居者にフラットな関係性を

「ここは身寄りもなく、行き場をなくした人たちのための終の棲家です。マザー・テレサがインドのコルカタに開いた『死を待つ人の家』を想像してもらうとわかりやすいかもしれません」

山本さんは「きぼうのいえ」の理念をそう説明してくれます。ただ、ホスピスの型式でいうと、ここは「在宅ホスピスケア対応型集合住宅」ということになります。

「少しわかりにくいですが、うちはまず集合住宅として行き場のない人たちに住居と食事を提供しています。そして、入居した人に医療と看護サービス、排泄や入浴補助などの介護サービスを提供し、さらに最期の看取りもさせていただくということでは、在宅ホスピスになるわけです」この在宅ホスピスケア対応型集合住宅は、形式としては似たものが全国に1～2ありますが、従来の施設ホスピス（病院の緩和ケア病棟）、通常の在宅ホスピス（自宅で受けるホスピスケア）とは異なる第3のホスピスとして注目されています。

「施設ホスピスとの違いは、例えばうちの入居者には、末期のがんやHIVの患者さんだけでなく、重い心臓病、脳梗塞、パーキンソン病、認知症などの患者さんもいることです」

施設ホスピスは制度上、主にがんやHIVの末期患者さんだけを受け入れます。しかし、きぼうのいえは社会福祉法で「宿泊所」と認められるので、幅広い病気の患者さんを受け入れられるのです。ただ裏返すと、法律上はホスピスではないというわけですが、では医療態勢はどうなっているのでしょう。

「まず、末期がんの入居者に対しては、在宅ホスピス医の川越厚先生のグループにきていただ

き、ペイン・コントロールを中心にホスピスケアをしてもらっています」

川越医師はホスピスケアの先駆的医師の一人で、きぼうのいえとは指呼の間の墨田区内で在宅ホスピスケアの「グループ・パリアン」を開いています。山本さんはきぼうのいえの計画段階から川越医師に相談し、協力を得てきたといいます。

「がん以外の病気では、やはり協力してもらっている内科医が週1回、往診に来てくれるんです」

また、看護では妻の美恵さんが元看護師なので、看護主任として入居者を世話する一方、近くの訪問看護ステーションの協力も篤いそうです。

「訪問看護ステーションはドヤで暮らしている人もみていますが、彼らは病状が悪化すると救急車で病院へ運ばれてしまい、看護の継続性が切れてしまうんです。でも、うちに入居すれば、継続的な看護ができますから、立ち上げの最初から賛同してくれたんです」

それから、施設ホスピスでは医師が運営を主導する施設ホスピスに対して、非医療者の山本さんが責任者であるきぼうのいえでは、入居者とスタッフ、ボランティアの人たちの関係も変わっています。

施設ホスピスでは「傾聴」が重視され、スタッフやボランティアは患者さんの意見に異を唱えることはありません。しかし、ここではスタッフやボランティアが入居者の言葉や行動に憤りを感じたら、それを素直に相手に伝えてもよいと指導されているため、両者がフラットに近しく向き合う関係ができているようです。

それが自由な雰囲気ももたらしていて、入居者の中にはスタッフやボランティアに付き添われ、点滴のスタンドを押して近所のパチンコ店に出かける人もいるそうですから、なかなか傑作です。

「あ～っ！写真撮ってるんだから食べちゃダメ！」。入居者が自由でいられるきぼうのいえでは、いつも笑いがたえません。

「きぼうのいえ」の運営の仕組み

このように住居や食事、さらに医療・看護サービスを受けるきぼうのいえの入居者は、自分で費用を負担することはありません。なぜなら、きぼうのいえの財務は入居者の生活保護費を中心に運営されているからです。

「うちでは、入居を希望する人は台東区、墨田区などの福祉事務所を経て申請してもらっています。その人の生活歴や病気の治療情報などがわかるとともに、必然的に生活保護を受けている人が紹介されるわけです」

山本さんによると、一人の入居者が受け取る生活保護費は、おおむね月額14万5000円。そこから、きぼうのいえに支払われるのは13万円です。ちなみに山谷のドヤは「一泊食事なし・2300円」ぐらいで、月にすると約7万円。清潔な部屋と3度の食事が提供される13万円は、高いとはいえないでしょう。

「生活保護受給者は医療や看護サービスの自己負担は免除されているんです。ところが、うちの入居者に民間の訪問介護ステーションからヘルパーさんを派遣してもらうことは簡単にはいきませんでした」

これは社会福祉法で「宿泊所」と認定されていることが裏目になり、社会福祉事務所が介護保険の適用を渋ったからです。しかし、それも山本さんは粘り強い交渉を重ねて、認めさせたといいます。

山本さんのこうした行動力、また生活保護や介護保険などの社会資源を積極的に活用するタフな考え方は、どこからくるのでしょう。

志を持続させるための工夫
誰でも生きなおせる場所を目指して

「きぼうのいえを始めたぼくの気持ちを遡ると、子どもの頃に『困っている人やかわいそうな人を助けたい』という思いが強かったことにたどり着きますね」

ふつう子どもの淡い博愛意識は自我形成の過程で霞んでいくものですが、山本さんは逆に成長とともに強くなったといいます。

しだいにキリスト教に強くひかれるようになり、20歳の頃にキリスト教の洗礼を受けます。さらに、上智大学の神学部へ進み、聖職者を目指しますが、囲われた生活に苦しんで断念。その後、28歳から約10年間、小児がんの子供と家族を支えるNPO法人「ファミリーハウス」の事務局で働き、事務局長も務めました。

「これは小児がんで自宅から遠いこども病院などに長期間入院する患児、それに付き添う家族のために、精神的不安や経済的負担を軽減する宿泊施設をつくるという運動です。ここで、福祉活動にはどんな法律があるか、組織の運営はどうあるべきか、助成団体や企業から寄付を得るにはどんな交渉が必要かということを学びました。」

カトリックや聖公会を連想させる、きぼうのいえの屋上にある礼拝堂。様式こそキリスト教ですが、きぼうのいえの目指す宗教性は、人間に普遍的に存在している宗教性の大らかな抱合。おのおのが持っている宗教性を排斥せずに、「どんな宗教も、いのちを前にして目指すところはひとつである」というのが、きぼうのいえの信念です。

この経験は、「ハウス」という点で共通するきぼうのいえの立ち上げに大きな力を与えてくれたといえそうです。

周到な計画と準備をもとに船出したきぼうのいえは、今年の秋で丸4年を迎えます。運営はまずまず順調のように見えますが、財政的には毎月約80万円の赤字が出ているといいます。それを補っているのは、キリスト教団体などからの現金の寄付と、きぼうのいえに賛同してくれている個人からの後援会費が頼りだといいます。

その赤字体質を変えるため、山本さんは2カ月前、きぼうのいえや山谷のドヤにヘルパーを派遣するヘルパーステーションを設立しました。

「これが軌道に乗ると、今の赤字が半分ぐらいに圧縮できます。介護サービスでは、六本木ヒルズに入っているような会社もありますが、ぼくたちが志を持続していくためには、それなりに現実的な工夫も必要ですから」

こうした展開にも、山本さんの思考と行動の柔軟さとタフさがうかがえます。

ところで、きぼうのいえには批判的な声もあります。「ホームレスは自業自得だ。税金も払っていないのに、生活保護や社会福祉の恩恵を受けさせるのはおかしい」というものです。

「でも、うちに入居するような人たちは戦後60年をコツコツ働いて支えてきたんです。シベリアに抑留された人、東京タワーを作った溶接工、地方出身の小さい会社の経営者、銀座で屋台を引いてきた人、劇場の照明係……。そんな人たちがいろんな事情で行き場を失い、山谷に流れてきた。それを見捨てておいていいものでしょうか」

山本さんは、自分も頑張りすぎる性格からうつ病で苦しんだ経験があるので、ホームレスの気持ちがわかると話します。

「人生の終幕を迎えている彼らに、恨みと歯ぎしりではなく、ああ、人生はいいものだと少しでも感じてほしい。自分の人生に『イエス！』といえる、ささやかな生き直しのチャンスは誰にだって与えられるべきです」

今の社会は、自己責任を振りかざして格差社会へ突進し、ますます沈んでいく人たちが増えるでしょう。そんな社会は豊かな社会であるはずもありませんが、せめて人生の最期で、その人の生き方の是非を問うのではなく、命そのものを丸ごと肯定し受け入れる場所があること。そういう包容力のある社会は、人の心を豊かにすることにも繋がるはずです。

「東京のドヤ街・山谷でホスピス始めました。
『きぼうのいえ』の無謀な試み」

山本雅基著／実業之日本社／1600円＋税

ここはおじいちゃんの少年院 !? 余命わずかな身寄りのない人々、元日雇い労働者らと暮らす、涙と笑いの日々。東京・山谷のドヤ街の一角に、在宅型のホスピスケア施設「きぼうのいえ」を開設した著者が、施設の日々を語る。